

システムソフトウェア

2021年度

第7回 (10/25)

月曜7-8限・木曜7-8限(Zoom)

講義担当：渡部卓雄 (Takuo Watanabe)

<http://titech-os.github.io>

e-mail: takuo@c.titech.ac.jp

本日のメニュー

- xv6のプロセス

xv6の起動

起動するカーネルのプログラム

エミュレートするマシンの種類

```
$ cd xv6-riscv
$ make qemu
qemu-system-riscv64 -machine virt -bios none \
    -kernel kernel/kernel -m 128M -smp 3 -nographic \
    -drive file=fs.img,if=none,format=raw,id=x0 \
    -device virtio-blk-device,drive=x0,bus=virtio-mmio-bus.0

xv6 kernel is booting

hart 2 starting
hart 1 starting
init: starting sh
$
```

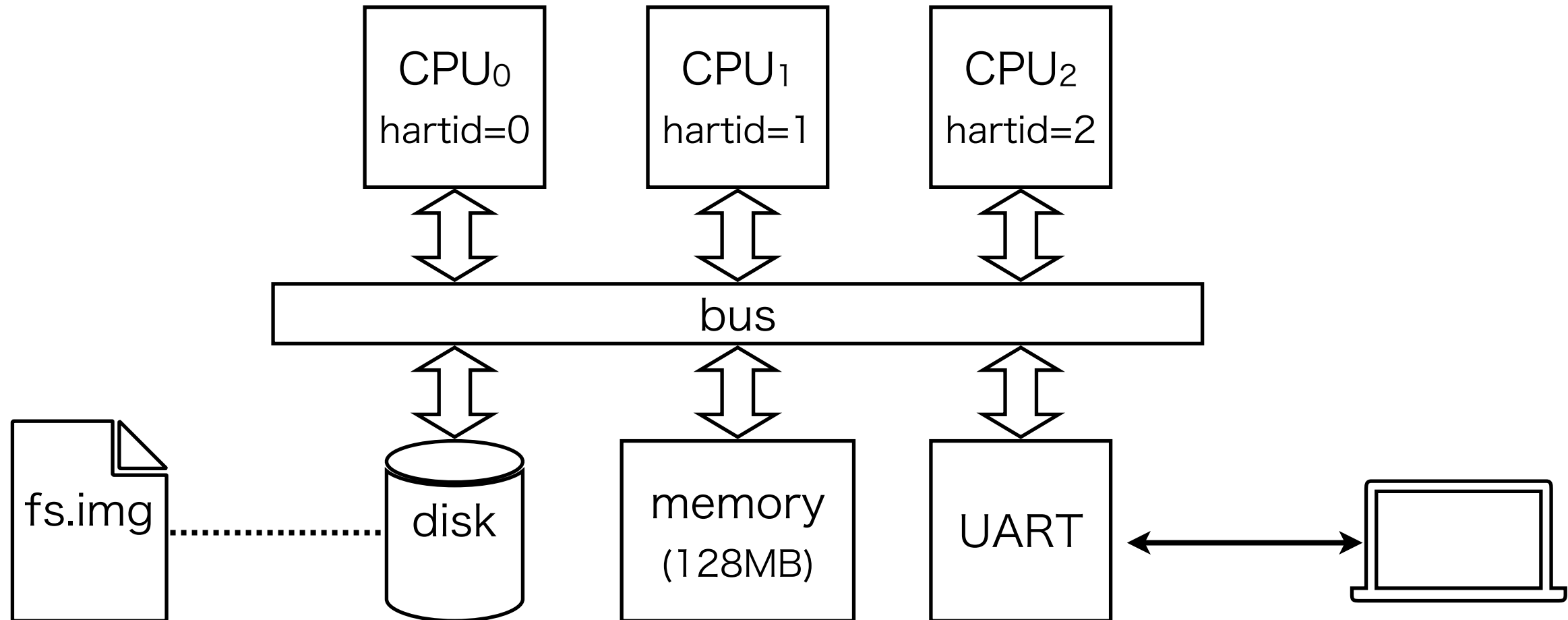
メモリサイズ

CPUの個数

xv6-riscvの「ブート」

- 多くのコンピュータでは電源投入時（リセット時）に起動するプログラムがROMに入っている。そのプログラムは最初に自己診断を行い、続けて二次記憶装置に格納されているブートローダと呼ばれるプログラムをメモリにコピー（ロード）し、それに制御を移す。
- ブートローダはOSカーネルのコードを二次記憶装置からロードし、それに制御を移す。
 - － 多くの場合、最初に起動するブートローダはより高機能なブートローダをロードする。最終的にOSカーネルをロードする前に複数のブートローダを経由する。
- 現在のxv6-riscvでは以上の手順は省略されており、最初から主記憶内にカーネルがロードされた状態で起動する。
 - － QEMUの `-kernel` オプションでロードするファイルを指定している。

エミュレートされるマシン



kernel/kernel

```
$ file kernel/kernel
kernel/kernel: ELF 64-bit LSB executable, UCB RISC-V, version
1 (SYSV), statically linked, with debug_info, not stripped
$ rm kernel/kernel
$ make kernel/kernel
riscv64-unknown-elf-ld -z max-page-size=4096 \\\
  -T kernel/kernel.ld -o kernel/kernel \\\
  kernel/entry.o kernel/start.o kernel/console.o \\\
  kernel/printf.o kernel/uart.o kernel/kalloc.o \\\
  kernel/spinlock.o kernel/string.o kernel/vm.o kernel/proc.o kernel/swtch.o \\\
  kernel/trampoline.o kernel/trap.o kernel/syscall.o \\\
  kernel/sysproc.o kernel/bio.o kernel/fs.o kernel/log.o \\\
  kernel/sleeplock.o kernel/file.o kernel/pipe.o \\\
  kernel/exec.o kernel/sysfile.o kernel/kernelvec.o \\\
  kernel/plic.o kernel/virtio_disk.o
riscv64-unknown-elf-objdump -S kernel/kernel > \\\
  kernel/kernel.asm
riscv64-unknown-elf-objdump -t kernel/kernel | \\\
  sed '1,/SYMBOL TABLE/d; s/ .* / /; /^$/d' > \\\
  kernel/kernel.sym
$
```

リンカスクリプト

コンパイルしたバイナリからカーネルの実行形式を作成

デバッグ情報
あまけ

kernel.ld (リンクスクリプト)

```
OUTPUT_ARCH( "riscv" )  
ENTRY( _entry )
```

実行を開始する場所

```
SECTIONS  
{
```

```
    /*  
    * ensure that entry.S / _entry is at 0x80000000,  
    * where qemu's -kernel jumps.  
    */
```

```
    . = 0x80000000;
```

カーネルの開始アドレス(KERNBASE)

```
    .text : {  
        *(.text .text.*)  
        . = ALIGN(0x1000);  
        _trampoline = .;  
        *(trampsec)  
        . = ALIGN(0x1000);
```

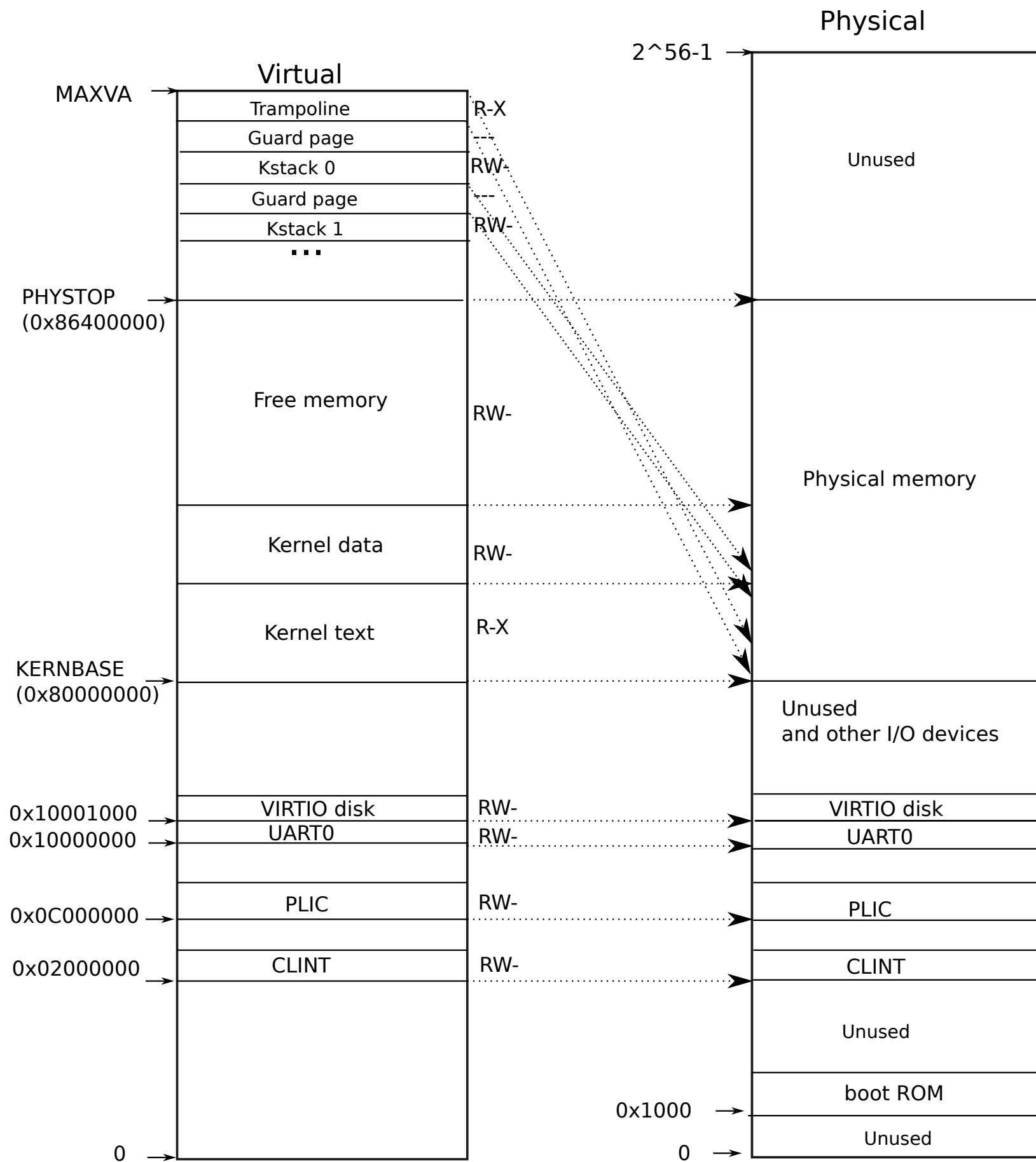
テキストセクション（実行可能コード）の直後にランポリンと呼ばれる1ページのセクション（これも実行可能コードの一部）を作っている

```
        ASSERT(. - _trampoline == 0x1000, "error: trampoline  
larger than one page");  
        PROVIDE(etext = .);  
    }
```

```
    ...
```

メモリレイアウト

- memlayout.h
 - 主にカーネルのメモリレイアウトを決めるための定数（マクロ）の定義
- riscv.h
 - RISC-Vの特権命令を呼び出すためのインライン関数の定義
 - 各種フラグの読み書きのためのマクロ
 - 論理アドレスの最大値 $\text{MAXVA}(=2^{38})$



カーネルの起動(各CPU)

- 各CPUは `_entry` からスタートする.
- `_entry (entry.S)`
 - Cで書かれたプログラムが動作するようにスタックを設定して, `start` を呼び出す.
- `start() (start.c)`
 - 割り込み関連の初期化
 - タイマ割り込みの設定・有効化
 - マシンモードからスーパーバイザモードに移行するための準備
 - `mret`命令を実行してmainに制御を移す
 - この命令は本来マシンモードの割り込みから戻るときに用いられるが, そのときにより低いモード (スーパーバイザモードやユーザモード) に移行することができる. そこで`mret`の「戻り先」をmainの先頭アドレスに設定しておき, mainに「戻る」と同時にスーパーバイザーモードに移行する.

```

volatile static int started = 0;

// start() jumps here in supervisor mode on all CPUs.
void
main()
{
    if(cpuid() == 0){
        consoleinit();
        printfinit();
        printf("\n");
        printf("xv6 kernel is booting\n");
        printf("\n");
        kinit();           // physical page allocator
        kvmalloc();        // create kernel page table
        kvmallocinit();    // turn on paging
        procinit();        // process table
        trapinit();        // trap vectors
        trapinitinit();    // install kernel trap vector
        plicinit();        // set up interrupt controller
        plicinitinit();    // ask PLIC for device interrupts
        binit();          // buffer cache
        iinit();           // inode table
        fileinit();        // file table
        virtio_disk_init(); // emulated hard disk
        userinit();        // first user process
        __sync_synchronize();
        started = 1;
    } else {
        ...
    }

    scheduler();
}

```

main (CPU₀)

} 上記は
コンソールに何かを出力するようにしてある。

メモリ関連の設定

プロセステーブルの初期化

} 割り込み関連の設定

} ファイルシステム関連

initの起動

main (CPU₁~)

```
volatile static int started = 0;

// start() jumps here in supervisor mode on all CPUs.
void
main()
{
    if(cpuid() == 0){
        ...
        __sync_synchronize();
        started = 1;
    } else {
        while(started == 0)
            ;
        __sync_synchronize();
        printf("hart %d starting\n", cpuid());
        kvminithart();    // turn on paging
        trapinithart();   // install kernel trap vector
        plicinithart();   // ask PLIC for device interrupts
    }

    scheduler();
}
```

} CPU₀ を待つ

メモリ管理関連の設定

- kinit() (kalloc.c)
 - kallocのための初期化处理
 - kallocはフリーメモリから1ページもらうための関数
 - 線形リストによる素朴なメモリ管理
- kvminit() (vm.c)
 - カーネルのページテーブルを設定
- kvminithart() (vm.c)
 - kvminitが作ったページテーブルを有効化

プロセスと割り込み関連の設定

- procinit (proc.c)
 - － プロセステーブルの初期化
 - ロックの初期化とカーネルスタックの割り当て
- trapinit (trap.c)
 - － 割り込み関連の初期化
 - タイマー割り込みのロックの初期化のみ
- trapinithart (trap.c)
 - － カーネルモードでの割り込みベクタの設定

xv6-riscvでの割り込み

- ユーザモード
 - システムコール
 - タイマー割り込み
 - デバイス (UART, ディスク) からの割り込み
- スーパーバイザモード
 - タイマー割り込み
 - デバイス (UART, ディスク) からの割り込み
- タイマー割り込み
 - 一旦マシンモードに移行し, そこからスーパーバイザーモードの割り込みを発生させている

割り込みハンドラ(1)

- `uservec (trampoline.S)`
 - 論理アドレスの一番最上位にあるトランポリン (`trampoline`) ページにあり, ユーザモードで発生した割り込みを処理する
 - レジスタ等を `trapframe` に保存し, カーネルのページテーブルに切り替えてから `usertrap()` を呼ぶ
 - トランポリンページはカーネルの論理アドレスでも同じ位置にあるため, `uservec` はページテーブルを切り替えてからも問題なく動作する.

割り込みハンドラ(2)

- kernelvec (kernelvec.S)
 - スーパーバイザーモードで発生した割り込みを処理する.
 - レジスタをカーネルスタックに保存したのち kerneltrapを呼ぶ
- timervec (kernelvec.S)
 - タイマー割り込みのハンドラで, マシンモードで動作する
 - 次のタイマー割り込みを設定したのち, スーパーバイザーモードの割り込みを発生させる

スケジューラ

- scheduler (proc.c)
 - 各CPUが実行
 - プロセステーブル(proc)をみてモードがRUNNABLEになっているものがあったらRUNNINGに切り替え, swtchで制御を移す

プロセスの生成(fork)

- allocproc (proc.c)
 - プロセステーブル(proc)からUNUSEDなものをひとつ見つけて初期化
 - pidの割り当て
 - trapframeとページテーブルの設定
 - コンテキストの設定
 - カーネルスタックの底をコンテキストのspに設定
 - forkretをコンテキストの戻りアドレスに設定
- fork (proc.c)
 - allocprocでプロセスの「種」を生成
 - 親プロセスのメモリ空間をコピー
 - 親プロセスのレジスタ(trapframe)をコピー

プロセスの生成(init)

- userinit (proc.c)
 - allocprocでプロセスの「種」を作る
 - 1ページだけのメモリ空間を作り, initcodeの内容をコピーする
 - initcodeは exec("init") を実行するだけのコード
 - 当該ページの先頭(0)をpcに, 末尾をスタックポインタとしておく
 - RUNNABLEにする

まとめ

- xv6のプロセス
 - コンピュータの起動
 - メモリレイアウト
 - カーネルの起動
 - スケジューラ
 - 割り込みの仕組み
 - 割り込みハンドラ
 - トランポリンとトラップフレーム
 - プロセスの生成
 - fork / init